
バクフーン・ラグラーズV . S . レアコイル・フシギダネ

ジャック・A・サンダース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バクフーン・ラグラージV・S・レアコイル・フシギダネ

【Nコード】

N4116W

【作者名】

ジャック・A・サンダース

【あらすじ】

ある晴れた日の昼。とある山の高原付近の森に住むフシギダネは、友のレアコイルと共に日向ぼっこを楽しんでいた。そこに、山の麓で沼の主をしているラグラージと、その相棒バクフーンが通り掛かる。

付近一帯で暴君と悪名高いそのラグラージの姿に、激しく警戒するフシギダネ。だが、虫の居所が悪かったラグラージに見付かってしまい、喧嘩を吹っ掛けられてしまう。

野生ポケモン同士の激しいダブルバトル。

(前書き)

粗筋にも書いた通り、本小説は野生ポケモン同士の激突であり、人間は一切登場しません。

また、作中の殆どが戦闘描写で占められています。何も考えずに気楽に読めるかとは思われます。

この日、天気は快晴とまでは言えなかったものの、そこそこ青空の覗くいい天気だった。数日前に二日も続けて降った豪雨が最早嘘のようで、やっと地面も乾いた今日は、絶好の散歩日和である。近所の森に住むフシギダネは、久し振りに背中の中の種に日の光を浴びながらも、乾いた地面を踏みしめて散歩を楽しんでいた。

ところが、そのフシギダネの隣には姿形は愚かタイプすらをも全く違うレアコイルの姿が浮かんでおり、奇妙で異質なコンビを日の下に曝している。しかし、互いに争うわけでも無く、むしろ会話しながら歩くその姿は、この高原の平和を表しているかのようだった。ここは、そこそこの標高を持つどこかの山の山腹。そして、今フシギダネ達がいるのはその中にぽっかりと空いた、背の低い草のみが生えた高原である。普段ならば、ここには彼等の他にもたくさん草タイプのポケモンが住んでいるのだが、あの大雨の影響なのか、皆森の中へと避難したままのようだ。

「皆居ないね」

「まあ、あの雨と雷じゃあ、ね。流石に僕も避難したし」

高い位置から周囲を見渡すレアコイルの言葉に、フシギダネが見上げながら相槌を打つ。

さらに、ここで一息ついたフシギダネは、語尾を上げ調子にレアコイルに訊いた。

「どうだった？ 久し振りの雷」

「結構良かったと思うよ。僕的には」

共通点の無いはずのレアコイルとフシギダネが、全く同じこの場所ので共存できている理由、それは、双方の生活スタイルが互いに干渉し合わないからであった。

言うまでも無いが、フシギダネが生きるために必要なものは、光合成に使う二酸化炭素や水、日光、そして大地の栄養である。しか

し、レアコイルに必要な物はその体を流れる電流を維持するための雷だけ。

フシギダネ達にレアコイルと争う理由は無く、むしろ嵐の時に避雷針同然の働きをしてくれるレアコイル達を歓迎してさえた。またレアコイル達のほうも、嵐の時は思う存分雷を浴びられる上、特に何もしていないにも拘らず住む場所にも困らない。双方共に、争うよりも共存した方が得なのだった。

この日、山の麓の沼に住むラグラージは物凄い不機嫌だった。何しろ、数日前の豪雨のせいで川が増水、ラグラージの住む沼もその川の中に飲み込まれてしまったのだ。修復しようとは思うが、川に飲み込まれた今のままではどうせまた直した箇所から壊れるに決まっている。応急処置だけでなくちゃんと直そうと思えば、川の水位が元に戻るまでラグラージにはイライラと当てもなく歩き回る他にする事が無かった。

そんなラグラージの真横には、ラグラージが沼を拡張する時にあれこれと手伝ってくれたバクフーンの姿があった。彼はラグラージが沼を広げるのを手伝う一方で、その水を飲料水として使わせて貰っていたのだ。当然、沼の主であるラグラージに正式に水の利用を認めてもらっている事もあり、バクフーンは水周りには困らなかつた上に場所争いをする事もなかつた。

というのも、ちょっとでもバクフーンが苦言を言えば、すぐに協定を結んでいるラグラージが動いてくれるのだ。つまり、皆が必死で水周りの縄張りを争う中、バクフーンだけが悠々と喉を潤しに来る事ができる。このため、その沼の周辺ではラグラージと協力しているバクフーンはそこそこ有力者だった。

フシギダネは空き地の真ん中で腰を下ろすと、久し振りに高原の上に寝転んだ。雨が上がった後もずっとジメジメしていたこともあり、こうして寝転ぶのは雨以来である。青々と茂る草の葉先が体全

体を包容する感触がし、他のポケモンには一生良さが分からないであろう自然の匂いが鼻をくすぐる。

普段は浮いたまま移動するレアコイルも今日は非常に珍しく大地に下り、フシギダネの横へとその鋼の体を並べた。生憎草タイプでは無い為、確かにフシギダネほどにその感触に魅力を感じるわけでは無い。しかし、全身を日に照らされていると温められた体が火照り、緑の絨毯の上で眠たくなるのだけはレアコイルでも分かった。

ところが、この久し振りの平穏な時間は、そう長くは続いてくれなかった。

地面に直に体をくっつけていると、いつにも増して震動と言うのがよく伝わる。そのため、ズシズシと耳障りな震動が体中を震わせのを感じ、フシギダネ、そしてレアコイルは目を開けて体を起こした。

何か、図体の大きなポケモンが近付いて来るらしい。フシギダネとレアコイルは、その震動が山の麓の方から近付いてくるもの、もとからこの高原に住むポケモンが帰ってきたのだらうと思ひ、その場を動かなかった。しかし、その震動の主が木々の間から姿を現した時、フシギダネは反射的に体が強張ったのを感じた。

木々の陰から現れたのは、悪名高い山の麓にある巨大な沼の主、ラグラージ、そして、ラグラージがよくつるんでいると聞くバクフーンの姿だった。この山の中において、こんなコンビで行動するよくな連中は他にはいない。フシギダネは噂に聞くそいつ等の姿を目の当たりにし、この高原をも潰しに来たか、と歯を食いしばった。

フシギダネが奴等について聞いている噂は、どれもこれもとても良い内容と言えるものではなかった。特に、ラグラージについての悪い噂は絶える事がなく、沼を広げる為に周囲に生える木々を薙ぎ倒し、歯向かった者を容赦なく叩きのめす暴君だとフシギダネは聞いている。また、そのラグラージに上手く取り入ったバクフーンも、抵抗するポケモンの家を焼き払い、ラグラージでは苦手な草タイプのポケモンを追い出すのに一役買っているとも聞いていた。

まさか、そんな奴等がこんな所に姿を現すなんて。山の麓の森を次々に潰したただけでは飽きたらず、この高原までその支配下に入れる気か。

フシギダネは、この高原のさらに上にある自分の住む森の事も頭に思い浮かべ、冗談じゃない、と憤った。ここをこいつ等が支配したら、いつか自分達の住む森にまで魔の手を伸ばしてくるに違いない。そうなつては、フシギダネ達に行くあては無いのだ。

同じく奴等の噂を耳にしているはずのレアコイルもラグラージへと視線を送り、場違いな場所へと姿を現した相手の動向に目を光らせる。とはいえ、かなり強いとの噂も同時に聞いていたレアコイルは、完全に敵意のみしか懐いていないらしいフシギダネと違って不安をもその胸の内に併せ持っていた。

どうやら、妙な餓鬼がこつちにガン飛ばしているみたいだな。

ラグラージと共に山の中を徘徊していたバクフーンは、ふと沼から少し上った所の高原の中心にて、小さい影が二つこちらを見つめている事に気付いてそう感想を懐いた。

誰かは知らないが、こちらの事をじつと見つめて顔を逸らそうともしない。何の用か、と思えば理由が思い浮かばないではないが、ただ徘徊しただけで睨まれる筋合いは無い気がするのだが。むしろ、睨むならその前に山の治安維持に自分達が活躍している事も考慮にいれて欲しいものだった。

何しろ、山にやってくる移住者の中には、稀に山そのものに乗っ取りにくるようなとんでもない馬鹿もいる。そいつらをぶちのめして麓だけで被害を抑えてやっているのは、紛れもない俺達なのだ。とはいえ、山の上の方に住む連中はそんな事は露ほども知らないだろう。バクフーンは、平和ボケめ、と内心その影達を嘲笑すると、それらを気にしない事にした。

ところが、バクフーンが気にしなかったとしてもラグラージが同じように思うとは限らない。ただでさえ沼の件で気が立っており、

それを紛らわすためだけにウロウロしているのだ。その途中で敵意の籠った視線を向けられて、いよいよラグラージのイライラはほぼ最高潮に達した。

「おい、何なんだあいつ等は」

バクフーンは、同じように影に気付いたらしいラグラージの苛立ちの籠った言葉を聞いて、ふっと息を吐き出した。

あの影達も本当に愚かである。ラグラージの様子を見て、今不機嫌だという事が分からないのであるうか。今更気づいてももう遅いものの、バクフーンはこうなる前に目を逸らすなりさっさと失せるなりをしなかったその影を再度蔑んだ。

「知らねえよ」

個人的には、バクフーンにはあんなチンケでいかにも弱そうな小物の影如きに興味は無い。そのため、さっさと行こうぜ、と思いなから半分なだめる様にそう言っただけだが、ラグラージは一向に収まってくれない。

それどころか、もうあの影達を敵と判断してしまつたらしいラグラージは、体の方向を変えるとその影達の方へと足を運んでいってしまう。

まあ、いい鬱憤晴らしにはなるかもしれないな。バクフーンはそう思い直すと、既に歩き出してしまつたラグラージについてその影達の元へと向かった。

どうやら、自分達は狙われてしまつたらしい。フシギダネは、憤怒の形相で近付いてくるラグラージと真正面から対峙しながらそう思った。

体格差で言えば三倍ぐらいの違いがあるラグラージは、まだ距離が離れているにも拘らず見上げなければ表情が見えない。見おろし否、見くだしてくるその視線の中には、敵意や怒りの色が見え隠れし、フシギダネは逃げなきゃ不味いだろうなと思った。

しかし、例え逃げたとしても、いずれ森を追われる時には戦わな

ければならなくなる。自分が産まれてから住んでいた森を目の前で焼け野原にされるような真似は耐えられない。

フシギダネはどの道逃げても一緒なのだと思うと、殆ど碎けそうな足に力を入れなおして踏ん張った。ここで、何として食い止めるんだ。

「ね、ねえ、何してるの、早く逃げようよ」

その時、既にフシギダネよりも半身引いたレアコイルが、震える声でフシギダネにそう声をかけた。

聞くからに怖気付いた、悲痛な説得の声だ。だがフシギダネはチラリとレアコイルに目をやると、反対に声をかけなおした。

「どうせ今逃げて、きつとあいつ等は僕等の森にまで攻撃してくる。そうだったら、もう僕も君も住む所がなくなっちゃうよ」

穏和なフシギダネにしては珍しい、力強い意志の籠った声。レアコイルは、フシギダネを置いて逃げるわけにも行かず、またこの声に気圧される形となり、結局この場に残ってラグラージ達と対峙する破目になった。

「行くよ」

ラグラージもバクフーンも、凶体のでかさで言えばレアコイルとフシギダネを合わせてやっと同じか、それでもまだ足りないぐらいの大きさをしている。フシギダネは、奴等が近づいてくるまで暢気に突っ立っておくのは得策じゃないと思うと、レアコイルに小さく呼びかけた。

バトルなんて滅多にしないが、それでもどうすればいいのか位は心得ている。体の小さなフシギダネでは、力尽くで押しつぶされる前に遠距離から攻撃を決めたほうがいい。

フシギダネは足に力を籠めて尚の事踏ん張ると、何一つ相手と言葉を交わす事も無く、まずはフシギダネの十八番、葉っぱカッターを繰り出した。それに誘発されて、続け様にレアコイルがトライアタックを撃ち放つ。

風に乗る、鋭い刃と化した幾多もの木の葉、そして三原色を一つ

にした光線がラグラージ達に向かい、挨拶にしてはえらく手荒な方法で彼等を出迎える。だが、彼等は素人では無い。すぐさまそれに反応したラグラージ達は、それぞれ冷凍ビームと火炎放射でそれらを迎え撃った。

戦い慣れしたラグラージ達の攻撃は、彼等自身の反応速度のみならず、技の威力の面でもフシギダネ達のそれを上回っていた。葉っぱカッターに真正面から突っ込んでいった冷凍ビームが、空中で四散するエネルギーの残滓だけで次々と木の葉を撃ち落とし、また火炎放射も、真正面からトライアタックを飲み込む。あつという間にフシギダネ達の攻撃は掻き消され、それどころか彼等の攻撃を飲み込んでそれでも尚威力の衰えない攻撃が、反対に彼等に襲いかかった。泡を食ったフシギダネ達は横っ飛びしてそれ回避、皮一枚でダメージを免れる。フシギダネは、さつと背中に冷たい何かが流れるのを感じながらも、続いてタネマシンガンを試してみた。いや、試してみた、というのは的確では無い。葉っぱカッターが全く歯が立たなかった上に相手の攻撃の威力の高さに焦ったフシギダネが、攻撃し続けていなければ自分達が倒される事が目に見えたための苦渋の策だった。

タネマシンガンは一発一発の弾は小さいものの、葉っぱカッターよりも弾数が多く、葉っぱカッターよりも速度が速い。葉っぱカッターが効かなくてもこれならまだ何とかなるか、と思ったフシギダネだったが、すぐさま反応したバクフーンの火炎放射がやはりこれをも飲み込んでしまう。

と、その時、地磁気を利用して誘導した力を相手に叩きつけるマグネットボムをレアコイルが放ち、バクフーンの攻撃中の隙を狙い撃った。だが、バクフーンの隙を狙うという事は、その間ラグラージが自由になるという事でもある。僅かな時間の間に力を溜め込んだラグラージは、バクフーンの前に飛び出すやいなやハイドロポンプを放ち、マグネットボム諸ともレアコイルの撃墜を狙ってくる。

火炎放射から逃れたフシギダネがラグラージを止めようと再度葉

つぱカッターを狙うが、今度はラグラージの斜め前に飛び出したバクフーンの火炎放射がフシギダネに迫る。さらに、一発ではフシギダネを倒せないと踏んだバクフーンは、短い時間の内に相次いで狙いをつけなおし、数発の火炎放射を連続で　　だが的確に放つてくる。

一発でもくればそれでオシマイ同然の威力を誇る火炎放射を相手に、フシギダネの反撃はここで完全に途切れた。ここが高原の中であるため障害物に使いそうな物が何一つないのが災いし、フシギダネは、爆ぜ回る火の粉から必死で逃げ回るしかなかった。

また、レアコイルも金属の光沢を利用して光の反射で攻撃するミラーショット、衝撃波であるソニックブームなどを色々と試してみている暇がなく、ラグラージはビクともしない。とてもフシギダネを援護している暇などなく、ラグラージの撃ってくる冷凍ビームやハイドロポンプを回避するだけで精一杯だった。それどころか、ラグラージは本来大きな弾を単体で放つのみである泥爆弾を自分で改良、小さな弾を連射するタネマシンガンのようなやり方で放つて来る。

最早こんな事をされてはレアコイルにも援護は愚かラグラージに攻撃する余裕すら無く、回避に専念するしかなかった。その上、狙いも正確のこの攻撃をかわす為に逃げる方向というものも選べず、あつという間にフシギダネとの距離も離されてしまう。

そのため、レアコイルはこの際使う技を選んではいられない、と電力を消費する為に普段は滅多に使わない電磁浮遊を使う事を即断した。

レアコイルは、普段からいつも少し浮いて行動するポケモンなのだが、だからといって何の苦勞も無しにそう高い所まで昇れる、というわけではなかった。ある程度から上に昇るには、自分で電力を消費して元々自分の体にある電磁石としての反重力作用を強化しなければならぬのである。だが、そのある程度の高度では、到底このラグラージを撒くのは無理に近い。撃ち落とされるのと力を使うのとを天秤にかけるとすると、どちらがいいのかはすぐに判断が付

いた。

レアコイルは躊躇いなく力を解放して空に上ると、ある程度はかわし易くなった対空砲火をさらりと回避、反撃にソニックブームを撃ち放つてやる。

別にソニックブームがこわいわけでは無いラグラージはすぐにそれを掻き消すが、レアコイルには、これだけでもかなりの余裕が出てきた事だけは間違いなかった。

上空を移動しながらラグラージをロックオンしたレアコイルは、今尚ピンチのフシギダネの援護に向かいながらもトリアタックやマグネットボムを連射した。取り合えず相手の攻撃を回避しやすくなったとはいえず、ラグラージのあの攻撃が届かないわけでは無い。少しでも移動しやすくするためには、ラグラージにも攻撃を掻き消させるか、回避させ続けなければならなかった。

ところが、ラグラージも馬鹿では無い。いつまでも地べたを這いずり回って対空砲火を撃っている事に業を煮やしたラグラージは、岩石封じを発動、地中から天に聳える巨大な石柱を数本作りだして見せた。さらに、ジャンプしてその岩肌を次々に飛び移って見せたラグラージは、あつという間に岩の上の方へとたどり着き、そこから泥爆弾を連射する。

図体の見かけによらず予想外の能力を見せたラグラージに、レアコイルの感じた束の間の安心感はあるという間に奈落の底に突き落とされた。大慌てで回避したレアコイルは何とか被弾だけは避けたものの、これでは空すらも相手の領域になったも同然である。

レアコイルはあわててラグラージから距離を取ると、そこからマグネットボムやミラーショットを連射する。

だが、ラグラージは自分の岩石封じによる岩を盾に攻撃を回避すると、レアコイルの攻撃が途切れたのを見計らってハイドロポンプを数発撃ってくる。距離が離れているにも拘らず、相変わらずの精度だった。

ソニックブームやトリアタックで反撃を狙うレアコイルだが、

ラグラージはすぐに岩の影に身を潜め、掠る気配一つない。最早お話にならないこの状況に、レアコイルは泣き出したくなった。

体が小さいという事は、それだけ攻撃をくらう面積も小さいという事。だが一方で、体が小さいだけ一発の攻撃を受けた時のダメージは凶体のかい奴のそれに比べてかなり大きく、また持久力も少ない。メリットは然りデメリットも大きいこの特徴を持っていながら、連射されるバクフーンの火炎放射を相手にこのフシギダネはよく回避を続けていた。

右に左に走り回り、一直線にしか飛ばない火炎放射を必死に避け続けている。しかし、避けるのに精一杯でとても攻撃に移る余裕は無いらしく、さつきから葉っぱカッター一枚飛んでくる事は無い。バクフーンは、さつきと決着を突けるためにももつと広範囲に攻撃する技があればなと思ったものの、生憎バクフーンの使えるそれは、ラグラージをも巻き込む可能性がある必殺技。水をも蒸発させ消し飛ばす威力のあるその技に巻き込んだでは、ラグラージも流石に無事では無い。

そのため、バクフーンには火炎放射しか残されておらず、ちまちまと小突き回して相手が倒れるのを待つしかなかった。

だがバクフーンが見る限り、体の小さなフシギダネの体力は既に限界に近かった。これ以上激しい回避を続けては攻撃をくらう前に体の方が壊れるのでは無いだろうか。次第に動きの鈍くなるフシギダネを相変わらず炎で突付き回しながら、バクフーンはそう思った。

ところが、ラグラージが岩石封じを使ったおかげで、この高原の中に遮蔽物が出来上がっていることもまた事実だった。バクフーンは、いつしかフシギダネがバクフーンが見る限り偶然だったがその岩群に近づいている事に気付き、小さく舌打ちした。

ラグラージの岩石封じの岩は、バクフーンの火炎放射では壊せない。あの岩の群れの中に逃げ込まれては厄介なことになる。バクフーンは、そう思うと今まで離れた所から炎を放つだけだったバトル

スタイルを一変、背中から炎を噴出しながらも四本足で駆けだした。そのまま、今度は移動しながら火炎放射を放ってやる。これで、例えフシギダネが岩陰に逃げ出そうとしてもこちらには対処のしようが生まれ、陰には隠れられなくなるどころか、むしろ岩に追い詰められる事になる。

バクフーンは、事実その考えの通りになりつつある相手の姿を認め、僅かに目を細めて笑った。

「うあ……」

ラグラージのハイドロポンプの発射音に混じってそうフシギダネが声を漏らしたのを聞く事になるのは、それから三十秒も経たない内にだった。

バクフーンは、案の定、いつの間にかフシギダネが岩陰に逃げ込もうとしていた事を覚り、甘かったな、と内心呟いた。その考えに流れたくなる気持ちは分からないでは無いが、それはあまりにも容易過ぎ、相手にもばれやすい。

墓穴を掘ったな。バクフーンはフシギダネに対してやはり内心でそう続けると、もうスタミナが限界らしく岩によりかかったフシギダネに最後の一撃を叩き込もうとする。

ところが、窮鼠猫を噛むということも考えて、あえてフシギダネに近付かなかったバクフーンは、このせいでフシギダネの次の行動への対処が僅かに遅れた。

フシギダネは、いままで全く出さなかった蔓を唐突に伸ばすと、自分が追い詰められた岩ではなくその隣の岩の上の方へと巻き付けた。さらに、蔓に気を取られたバクフーンとは裏腹に、フシギダネは蔓の方ではなく、自分の追い詰められた岩を唐突によじ登り始める。バクフーンは、蔓は陽動かと思ってフシギダネ本体へと火炎放射を放つが、フシギダネはくらう寸前に唐突に岩肌を蹴ると、空中へと身を投げ出した。

そのまま、蔓の巻きついた岩を中心に大きな円を描いて空中を回ったフシギダネは、次の火炎放射が蔓目掛けて放たれた事を覚ると、

そこで岩から蔓を放す。いや、蔓を放したのは火炎放射のせいではなかった。何時の間に思いついていたのかは知らないが、虚空を飛んだフシギダネの体の軌跡の先には、レアコイルに気を取られて背中を向けるラグラージの姿があった。

その背中目掛けて、空中からフシギダネが頭から突っ込んだのである。それも、バクフーンが見る限り、空中であのフシギダネは首を縮めていた。つまり、頭から突っ込んだのは事故では無い。あれはロケット頭突きを炸裂させたのだ。

完全に出し抜かれたバクフーンが慌てて岩を回りこむと、そこにはフシギダネの突撃の衝撃で目につんのめり岩に顔面をぶつけたラグラージの姿と、大慌てで逃げ出したらしいフシギダネの足跡のみがあった。

「よくもやりやがったな！」

刹那だった。完全にキレたラグラージが咆哮を上げ、そして両手を地面へとつける。

「気をつける、やつはただ者じゃない」

バクフーンは、殆ど聞いてないとは思いつつも一応ラグラージにそう忠告し、そして自分は後ろへと下がった。

直後、地面から水が染みだしてラグラージの傍へと集結。一気に巨大化した水の塊がさらに膨れ上がりながら相手目掛けて進み始め、岩石封じによって作られた岩を砕きながらも相手へと迫った。

ラグラージの十八番、広範囲に凄まじい破壊力の水の壁をたたき付ける事で攻撃する波乗りである。

地上にあるものを押し流す威力の波が迫り、バクフーンは、さすがにこれはフシギダネでもかわせないだろうと思った。何しろ、これをかわしたければ最低でも二メートルから三メートル近いジャンプ力があるのだ。まして、キレたラグラージの波はそんな生易しいものではない。軽く五メートルはある波の突撃を後ろから傍観し、できれば奴は自分が倒したかったなと思った。

ところが、これでもまだフシギダネは倒れなかった。あろうこと

かレアコイルの上に飛び乗ったらしいフシギダネは、レアコイルと共に空へと避難。鳥でも無いのに波の上を無傷で飛び超えたのだ。

しかし、それを見たラグラージはバクフーンが反応するのよりも早く、対鳥ポケモン用に習得している連係攻撃の準備に入る。

先程のロケット頭突きで余程神経を逆撫でされたらしいラグラージは、普段は周りへの影響がでかい為に滅多に使わないような攻撃を使う事にも躊躇いは無いようである。バクフーンは、ここで自分が下手に攻撃を放つてもラグラージの邪魔なだけだなと思うと、黙ったままラグラージの攻撃を見つめた。

普通の倍以上の大きさをもつ特大大玉泥爆弾を発射したラグラージは、それを相手が回避したその瞬間、水鉄砲でその泥爆弾を狙い撃ち、強制的に爆発させたのである。

僅かこれだけの技なのだが、確か、ラグラージはこれを空中炸裂弾とでも呼んでいただろうか。あえて相手に回避させてから起爆させる事で相手の油断を突き、また特大の泥爆弾が水鉄砲による水分をも含んで四散することで、空中でも広範囲に、大量の泥を撒き散らせる。その上、水分を含んでくっ付き易くなった泥は相手の体に纏わりついて素早さをも下げることができる技だ。

さすがにこんな攻撃を放つてくるとは思っていなかったらしいレアコイル達は、この泥を至近距離で、そしてまともに浴びた。

二次被害としてバクフーンも泥を被ったものの、泥爆弾の爆心から離れていた事もあり、そこまで被害は無い。軽く首を振り、そして背中を強める事で急速に泥を乾かしたバクフーンは、相手を撃ち落とそうと火炎放射の準備に入った。

読めなかった。フシギダネは、泥爆弾と水鉄砲による奇想天外な攻撃をまともに浴び、口の中に入った泥を吐き出しながらそう思った。かわしたはずの攻撃がいきなり炸裂すると言うのは、フシギダネにも、そしてレアコイルにも想定外である。

さらにこれは、フシギダネ達にとってこの戦いが始まって初めて

のまともなダメージだった。フシギダネは気が挫けそうになったものの、残念ながら、戦いの途中に精神面を立て直すような時間は与えられない。すぐにラグラージ達が次の攻撃の準備をしている事だけを覚ったフシギダネは、精神的なダメージを無視し、次の手を考えた。

「ねえ、僕が飛び降りたら、地面に雷撃って」

「へ？」

「いいから！」

自分にとって今は足場でもあるレアコイルに対し、フシギダネはそう呟く。

今、この高原全体は、ラグラージの放った波乗りによって濡れている。そして、十万ボルトでは威力不足でも雷ならば、電気が地中に四散するその前に濡れた地表を通電させる事ができる。奇想天外な攻撃を仕掛けてこられるのならば、こちらもそれで返すのみだ。

フシギダネは、最早時間が無いためレアコイルが承諾の返事を返してくるのを待たなかった。ただレアコイルの事を信じ、足場になっているコイルの内の一つから一気に飛び上がると、そこから狙いも乱雑に葉っぱカッターを乱射する。あくまで、自分は陽動。当たろうが当たらないが関係無い。ようは、気を引ければそれでいいのだ。目論見どおり、相手は両方ともフシギダネに気を取られた。まさかこちらが飛びかかってくるとは思わなかったのか、さっきとは違って狙いが幾らか雑な冷凍ビームがフシギダネのそばを通り過ぎる。泥で塗れた体には、冷凍ビームの放つ冷気は正直堪えた。

刹那、レアコイルが体中から電気をより集め、そしてフシギダネの言葉どおりにそれを地面目掛けてぶっ放す。

瞬間的な空気の膨張による轟音、そして桁外れの電圧による閃光が周囲に撒き散らされ、と同時に、地面に解放された電流があたりを暴れ回った。

まずその電流は、濡れた大地を伝ってラグラージへと襲いかかる。だが、ラグラージは元々地面タイプ。電気如きに怯むような相手で

は無い。そのため、電流が流れてもラグラージは気を割きすらもしなかったが、バクフーンは違った。

地面タイプは無い上に、泥爆弾を浴び、また足下が波乗りの影響で濡れている。感電するための下準備は、既に済んでいるのだ。そこへ通電した雷の支流が襲いかかり、バクフーンは警戒外の足下からの攻撃に思わず悲鳴をあげた。

どんなに弱くても、不意をつく攻撃ほど威力を発揮するものはない。そのため、レアコイルの放った雷の大半は既に地中に逃げていたものの、僅かに残った電流をくらっただけでバクフーンは片膝をつかされた。バクフーンからすればこれは大したダメージの内には入らなかったものの、予想外の位置からの攻撃を受けたという事実は、バクフーンの中に少なからず焦りを生んだ。

そして、この悲鳴にラグラージの気が一瞬逸れた。その隙を利用し、さつさと着地して尻尾を巻いて逃げ出したフシギダネは、レアコイルが後ろから援護射撃を放ってくる中、一目散に相手から距離を取る。

「責様あ！」

バクフーンのざまを見てラグラージが吠え、続け様にハイドロポンプを放つ。

フシギダネとレアコイルを交互に狙ったものだったが、フシギダネはまだしも、空中で三次元移動の出来るレアコイルには、これがかわすのはそこまで難しくない。距離がそこそこ離れていた事もあり、苦も無く回避したレアコイルはお返しにソニックブームを放つ。

だがその時、立ち直ったバクフーンの極大火炎放射がレアコイル目掛けて放たれ、レアコイルは大慌てでそれを回避した。

雷のせいで、バクフーンの標的はレアコイルに変わったらしい。フシギダネは自分の方への攻撃が疎かになった事からそれを確かめると、タネマシンガンによる弾幕を張った。殆どどこるか全く効かないのは百も承知だが、このままではレアコイルが不味い。葉っぱ

カッターも効かないためのなけなしの援護であつた。

ところが、このなけなしの援護に対し、予想以上にラグラージが食いついてきた。こちらを目障りだとも言いたげに冷凍ビームを連射し、レアコイルへの攻撃が一時的に落ち着いたのだ。

だが、レアコイルへの攻撃が落ち着く分、やはりその分のツケはフシギダネに回ってくる。レアコイルは、自分と引き換えに冷凍ビームの連射を受け始めたフシギダネを援護する為、一先ずバクフーンを放つておいてラグラージ目掛けてトライアタックを放つ。

火炎放射をかわしながらそれでも攻撃を放ってくるレアコイルに対し、ラグラージは再び攻撃目標を変更した。怒りは、戦闘能力は上げるものの行動が単調になる。戦い慣れたラグラージなら、当然悟つていてしかるべき理論。だが、怒りに半分我を忘れたラグラージは、それに気付く余裕も無い。

再び岩石封じを乱発してレアコイルの射線を遮ったラグラージは、ソニックブームを岩の陰でかわしながら泥爆弾による弾幕を張つた。ところが、である。岩の陰という絶好の遮蔽物を使えるのは、何もラグラージ自身やバクフーンだけでは無い。当然レアコイルも使えるわけであり、ラグラージの泥爆弾連射を受けたレアコイルは、悠々と岩の陰へと姿を消す。

フシギダネも、このレアコイルが相手の気をひきつけてくれたその間に岩の陰へと滑りこみ、相手の様子を窺つた。

また波乗りでも来るのでは無いだろうか。そうなれば、またレアコイルに飛び乗らなければなくなる。ラグラージが岩石封じを乱発したおかげで、この場には十本を超える石柱が乱立しており、フシギダネは、この内のどれにレアコイルがいるのかわからなかった。

ところが、ラグラージは全体攻撃を放とうとはしなかった。先ほどの展開から、どうせまたレアコイルの上に乗るつもりだという事を見抜かれたのだろうか。各個撃破をするつもりらしく、ラグラージは駆けだすと、そのままこちらへと突っ込んでくる。

その時、レアコイルが空高く舞い上がり、上から悠々とソニックブームをばら撒いた。

他のレアコイルの使える攻撃と違い、ソニックブームは空気の波動。攻撃範囲は、放射線状に広くなる。そのため、僅かながら足止め効果のあるこの攻撃のせいで、ラグラージは岩の陰へといった身を潜め、動きが鈍くなる。

そこで、フシギダネは再び、さっき使ったのと同じ戦法を使って見る事にした。

蔓を岩肌へと巻きつけて岩を中心に加速をつけ、そのまま空中から相手に飛びかかるあの技である。目だったジャンプ能力も無く空も飛べないフシギダネからすれば、あれは画期的な攻撃方法であった。

あの時は、追い詰められて脱出する時にとっさに思いつき、そして即席でやってしまったというのが本音だったが、この岩だらけの中なら、もっと効果的に攻撃できるに違いない。

フシギダネは、そう言えばまだこの戦いの中では一発も放っていない飛び道具を思い起こすと、その準備をしながら、ラグラージを奇襲するタイミングを見計らった。

あの雷がよほど頭にきていたバクフーンの攻撃目標は、もっぱらレアコイルのままだった。

そのため、上空にいるレアコイルの攻撃が少しでも止んだその瞬間、バクフーンは岩陰から飛び出してレアコイルを火炎放射で狙うというサイクルを続けていた。本当なら、奴がバクフーンの真上に来てくれれば噴煙による攻撃を狙えるのだが、残念ながら射程距離が短くどちらかと言うと横より上に攻撃するこの技は、真上に来てくれない相手目掛けて放ったのでは単なる煙幕と変わらない。そのため、隠し球として最後まで噴煙を取って置く事にしたバクフーンは、火炎放射だけを武器に、噴煙を放つタイミングを見計らっていた。

ところがその時、バクフーンは身を乗り出した場所から岩と岩の間に見える別の岩の頂に緑色の紐のようなものが巻きついているのを見て、瞬間的にこれが何を意味するか覚った。

あのフシギダネが、またあの奇妙な攻撃を放つつもりらしい。

「気をつける！ チビが来るぞ！」

あの岩からこちらまでの距離は、かなり離れている。恐らく、こちらには届かない。ということは、あの攻撃目標はまたラグラージなのだろう。そう結論したバクフーンは、声を張り上げてラグラージに忠告した。

ラグラージがこのバクフーンからの忠告を聞いた時、既にその体はフシギダネの攻撃の射程距離内に足を踏み入れていた。だが、頭に血が上り、フシギダネの事を半ば忘れかけていたラグラージがこれで周囲を警戒した時、ラグラージは、フシギダネよりも先に手を打つ事ができた。

岩の周りを回って攻撃してくるあの技は、岩陰から急に飛びかかってくる上軌道を読み難く、一直線に突っ込んでくる攻撃よりも確かにタチが悪い。だが、所詮突撃は突撃。相手さえ見えていれば撃ち落とせないわけでは無い。

ラグラージは、一泊遅れてフシギダネが突っ込んでくる直前には、既に腕を振り上げて迎撃準備している事ができた。

突っ込んできた暁には、これで殴り落として踏みつけた後で至近距離から凍らせてやるのだ。さんざん俺達を馬鹿にした身の程知らずに、実力の差を教え込んでやる。

ところが、ラグラージは満を持して殴り落とす準備をしたのはいが、一つ致命的な事を見落としている事に気づかなかった。それは、フシギダネが前回と“全く同じ方法”で飛びかかってくるとは限らないと言う事である。つまり、前回同様、ロケット頭突き“のみ”を狙ってフシギダネが突っ込んでくるとは限らないという意味だった。だが、最初の仕掛け方が同じ方法の為、てっきりただ突っ込んで来るだけだと固定概念に囚われたラグラージは、フシギダネ

が応用を入れてくるその瞬間まで、それに気付けなかった。

ラグラージとまともに対峙したフシギダネは、最後にロケット頭突きを発動する事は同じでも、今回はその前にクッション入れた。空中でスピードに乗ったまま、その状態から一発、エナジーボールを放ったのである。

元々飛び道具としてはそこそこの速度を持つこれを、フシギダネ自身が加速した状態で放つ。このため、元々の速度にこのフシギダネ自身の速度を加算した高速のエナジーボールが真正面からラグラージを出迎え、殴り落とす準備しかしていないラグラージを慌てさせた。

下手な飛び道具と違ってほぼ実体の無いに等しいこのエネルギーの塊は、殴り落としたところで受けるダメージは等しい。ただ、それを胴体で受けるか、腕で受け止めるかの違いではない。そのため、背に腹は変えられずに腕で顔を庇ったラグラージは、エナジーボールを受け止めた直後、再びフシギダネのロケット頭突きを受け止める破目となった。

来る事は分かっていたとは言えども、フシギダネが地上を走る最髙速度よりも速い空中遊泳状態からのロケット頭突きの威力は、そこまで無視できる物では無い。一泊先のエナジーボールの着弾の影響もあり、ラグラージは、初めてこのフシギダネを相手に一歩押されなければならなかった。

さっきの雷はフシギダネが陽動担当なら、この空中からのロケット頭突きはレアコイルの方が陽動担当か。

バクフーンは、相手から次から次へと出しぬかれて自分達が戦略負けしている事を覚ると、舌打ちと共にラグラージの元へと向かった。

途中、上からレアコイルがトライアタックとミラーショットを放ってくるが、あえて無視。ヒラリと攻撃をかわしたバクフーンは、まずは、あのフシギダネの方を消さなければならぬと決断した。さっきまでは先に煩わしいのから消そうかとも思っていたが、戦略

で負けて押されている今現在、そんな悠長な事は言っていられない。うざったらしいもののレアコイルは後だ。ここは、複数対複数による戦いの基本である、消せそうな奴から消して相手の頭数を減らす、というのを実行しなければマズいことになる。

ところが、バクフーンがラグラージの元へとたどり着いた時、ラグラージは殺気立った目でバクフーンに振り返った。

「地震使わせて貰うぜ」

フシギダネとの一騎打ちでももの見事に戦略負けを記したラグラージは、既に怒りが限界突破しているようだった。波乗り以上に周囲への影響が凄まじく、仲間へのダメージも避けられない地震を使う気になるとは。

バクフーンは正直、狂乱するラグラージに恐怖を覚えたものの、それはこの戦いさえ終わればなんとかなると割り切り、自分は自分でできる限りの事をしようと思いついた。

今までの姿を見ていれば分かるが、恐らく、今回も奴等はこの地震は食らわない。あのフシギダネはまたレアコイルに乗り、空へと逃げるはずだ。その時、少しでもフシギダネを撃墜できる可能製が大きくなればいい。

バクフーンは、レアコイルの事を無視してフシギダネだけに的を絞ると、その下準備として煙幕を吐く用意をした。その後、地震に巻き込まれて転倒しては元も子もない為、地に伏せて大地へとしがみ付く。

刹那、ラグラージが地に手をつき、その手から大地へと力を送り込んだ。その力は、目に見えない何かの媒体を通して元から地中にある自然のエネルギーと共鳴、それらが一気に暴走し始める。

いきなり爆発音に似た轟音と共に天に突き上げるような衝撃がバクフーンを襲い、正直、胃の中をミキサーにかけられた思いがした。しかし、縦横無尽に引つ切り無しに大地が揺れる間ひたすら耐え忍ぶしかないバクフーンは、まだ吐き気を催さないだけましか、と思いき直した。なにしろ、あらかじめ地震が来る事を覚悟でき、またし

つまり地面にしがみ付いた上でこれを受けたのだ。不意をつかれて地面の上を撥ね回るよりはよっぽどマシであろう。

やがて揺れが収まっていき、長く短い十数秒が過ぎ去ったのを覚ったバクフーンは、やっとの事で立ち上がった。

辺りを見回して見ると、地震で岩石に所々亀裂が入っているのが見える。ひよっとしたら、何かの拍子に壊れるかもしれない。バクフーンは軽くそう思ったが、その時はその時で避ければいいと思えばいいと、すぐに真正面　相手の潜んでいたであろう場所目掛けて煙幕を吐き出した。

地震というのは、それが起きる前に何かしらの前兆がある。大地が騒ぎ、地磁気が狂い、前持って予告してから暴れ回るのである。

そのおかげで、寸前にレアコイルに飛び乗れたフシギダネは、内心ホツと溜息をついた。危なかった。もう少しレアコイルに乗るのが遅ければ、自分は間違いなくこの凄まじい揺れの中を転げ回っていたところだ。

あのあと、ラグラージが怯んでいる間に一目散に岩陰をつたって距離をとっていたフシギダネは、地震が来るところを思っていなかったものの、何かしらの大技を警戒してレアコイルと合流していた。それが功を奏した結果となり、フシギダネは、体を預けるレアコイルに対し、小さく「助かった」と声をかけた。

「でも、どうする？　また空に行ってもアレが来るだけだよ？」

しかし、レアコイルは礼への答えを保留すると、まず第一に決めるべき事についてフシギダネに相談した。因みに、アレとは空中炸裂弾の事である。例えば空に逃げたとしても、またあれを撃ち上げられては元も子もない。鳥ポケモンではないためそこまで移動速度が速くないレアコイルでは、例えばあれが来ると分かっても恐らく避け切れない。

フシギダネの今の悩みは、その点だった。空に逃げたのはいいが、この先どうするかが思いつかないのだ。また地上に降り立とうとも

思ったが、相手が何か仕掛けてないとは限らないし、空は空で、また同じ攻撃が待っているに違いない。

かといって、このままレアコイルが中途半端な空にフシギダネを乗せたまま滞空していたとしても、それでは何も変わらないだろう。フシギダネは、答えようにも答えられず思わず押し黙ってしまう。「どうしよう」

その時だった。レアコイルが唐突に不安を滲ませた声でそう言い、フシギダネはそれにつられて前を見、なんだこれは、と思った。

何時の間にやら、分厚い真っ黒の煙の層が石柱を飲み込みながらフシギダネ達の傍まで迫っていた。確か、バクフーンは火炎放射を主流に使える炎タイプ。この煙が、何かを燃やして発生した物なのだとしたら、炎がもう直ぐそこまで迫っているような事態になっているのだろうか。

何を燃やしたのかも分からない今、危険をおかして煙の中に入るといふ選択肢も使えず、フシギダネは上昇する他に道が残っていない事を覚った。

とはいえ、相手がこの煙の中ならばこちらも相手の姿が見えないのと同様に相手もこちらの姿は見えないだろう。煙が何か分かるまで、取り合えず空で待機してみるべきだろうか。

フシギダネは、内心危ないだろうなと思いつつもそう思い直すしかなかった。

ラグラージの頭に生える一対のヒレは、実はよく知られていないがレーダーの役目をも果たしている。バクフーンは、ラグラージに對して何も言っていないものの、内心ではこの煙幕の中でも冴え渡るラグラージの索敵能力に期待しているのだった。

これで、相手が上に逃げたとラグラージが言えばラグラージが同じ手を使うだけだし、煙幕の中に突っ込んで来たと言っても、やはりバクフーンの目論見どおりになる。

バクフーンは、既に自分が相手がどっちに行っても目論見どおり

になるよう仕掛けた事を確認すると、ラグラージの反応を窺った。

「どうだ、あいつらは？」

「上だ。今度こそ撃ち落としてやる！」

バクフーンの確認に、ラグラージがそう押し殺した様に叫んだ。

そして、先程同様に大型の泥爆弾を作り、上　煙幕越しでバクフーンには見えない相手目掛けて撃ち放つ。その時、バクフーンは相手が上だと言う事を聞いて煙幕を改めて上に吐き直したのだが、ラグラージはこれには気付かなかったようだった。

さらに、バクフーンは立ち上がって右手に拳を作ると、上から泥爆弾が炸裂する音が響くのを待った。

今バクフーンが準備しているこの技は、相手が空中に逃げた今、自分だけでは発動させる事はできない。これを発動させる為には、ラグラージが泥爆弾を炸裂させ、水分を含んだ細かな泥を空中に撒き散らした一瞬を狙うしかなかった。本当は、フシギダネ達がこの煙幕の中に突っ込んでくる事を期待していたのだが、そうでは無い以上、その代わりに媒体をラグラージが作ってくれなければ意味がないのだ。

やがて、ラグラージが鋭く一回水を吐き出す音が聞こえ、バクフーンは、来た、と思った。

間髪入れずに、続いてその水鉄砲が泥爆弾を射抜いて起爆するベシヤツという音が空から聞こえ、バクフーンは、その瞬間力の入れた拳を大きく振り回した。

技名、雷パンチ。バクフーンが、前から対水タイプ用に習得しておいた技である。だが、このタイミングでこの技を使った目的は、この拳で直接何かを殴る事では無い。電気を帯びた拳をこの煙幕の中で振るう事で、煙幕そのものに通電させる事が目的だった。

事実、バクフーンの拳を離れて煙幕を構成する細かい粒子達を駆け巡った電流は、より通電しやすい空気中の水分　つまり、水分を含んだ泥爆弾の破片へと乗り移る。さらに、その電流は続いて泥爆弾の破片の至近距離にいる、体の大半が水分で構成される生き物

フシギダネへと通電した。

相手が濡れた地面を使って自分を感電させたのを応用した、変則的な電撃波である。

当たったかどうかは煙幕の中からは見えないが、バクフーンが目論見が成功したと仮定すれば、それは当たっていて然るべきであった。

フシギダネは、案の定撃ち上げられてきた空中炸裂弾が改良されていた事を身を持って知り、自分の考えが甘すぎた事を覚った。

これは火山が爆発した時、吹き上げられた粉塵の中で雷が轟くのと同じ原理である。粉塵の中というのは、細かな粒子がぶつかり合う事で元々多少なりとも電気が溜まっている。そこに、それが放電されるきっかけとなるような電流を放してやる事で、粉塵そのものの溜め込む電気が一気に臨界点を突破、周囲にある伝導体目掛けて四散するという仕組みなのだろう。

タイプ的には効果今ひとつとは言えども、戦い慣れしているバクフーンやラグラージの攻撃はそれを補って余りある程に一発一発の威力が高い。さらに、体の小さな自分の体力など、例えどれだけ鍛えたとしてもたかが知れている。フシギダネは、先程のただ泥を被った時のダメージと合わせ、この漏電した泥によるダメージがかなり堪えた事をも同時に覚った。

もう、後は無い。後一発　これ以上攻撃をくらえば、恐らく自分の体力は限界を迎えてしまう。

フシギダネは、追い詰められたな、と唇を噛む一方で、やはりあのラグラージ達に自分達だけで挑むのは無茶が過ぎたか、と思った。何しろ経験が、実力が違い過ぎる。

今までは、なんとかフシギダネ自身も今まで使った事が無いような戦法を繰り広げる事で抗ってきたが、フシギダネの攻撃を何発食らっても、ラグラージは全く倒れなかった。エナジーボールをまともに受け止め、そしてその傷跡に口ケツト頭突きを決められてそれ

でも尚、相手は地震を放つ体力を残していたのだ。

「大丈夫？」

その時、フシギダネはそう声をかけられ、うたた寝を叩き起こされたかの様にはっとした。

気が付けば、自身も傷だらけにも拘らず、フシギダネを乗せたままのレアコイルの目がすぐそこにあつた。そうだ、フシギダネが今までに攻撃をくらった二回とも、レアコイルも共にその攻撃を受けてきた。

体の丈夫さもあつて幾らか状況はフシギダネよりもマシらしいが、それでも満身創痍である事に変わりはない。

まして、レアコイルは最初、自分達がラグラーズ達に立ち向かう前に逃げようと声をかけてくれた。普通なら、あの状況になったら逃げるのが賢明な判断の筈。それを、フシギダネの意志だけで戦いに持ち込み、レアコイルをも巻き込んだのだ。

このまま、降伏するわけには行かない。自分の我がままとも言えるこの戦いに友をも巻き込んだ以上、最低でも、レアコイルだけは無事に帰さなければならぬ。

フシギダネだけが、暢気にこんなところで打ちひしがれているわけにはいかないのだ。

「……ああ。大丈夫」

数秒間の思案の後、フシギダネは無理矢理笑つて見せた。

まだ、負けたわけじゃない。流石にこれ以上攻撃をくらうのは無理だが、言い換えれば、ようは攻撃さえくらわなければまだ自分は動ける。いや、動いてみせる。

山の中腹という事もあり、中々強い自然風に煙幕が流されて何処かへと流れて行くのを再び岩の陰から見ながら、フシギダネは最後の反撃を決意した。起死回生。格闘タイプではないためにフシギダネがこれを放つ事はできないが、言葉の意味通りにやって見せる事ならば、まだできる可能性がある。

レアコイルから飛び降りたフシギダネは、汚れた体を震わせて泥

を落とすと、「行くよ」と、呼びかけた。

すぐに、「うん」とレアコイルが答え、二人揃って、相手がいるであろう岩の向こう側へと視線を飛ばした。

巨大な水の奔流が放たれる音が至近距離から発し、バクフーンは、やはりまだ最低でもどちらか片方が生き残っているか、と思った。

先ほどの空中炸裂弾に雷パンチの電力を通电させる対空技 漏電散弾砲を放ってからというもの、バクフーンはまだ一歩たりとも動いていない。否、自分で放った煙幕に視覚と嗅覚を潰され、動けなかったと表現するほうが正しいか。

実はバクフーンは、この煙幕をもつばら自分が尻尾を巻いて逃げる時にしか使った事が無かった。と言うより、煙幕というのはもとそのような使い方しか考えられていない。そのため、煙幕特有のクサイ臭いが中のポケモンの嗅覚を潰し、黒煙に似た煙幕によって視界をも潰される為、バクフーン自身にも煙幕の中で相手の位置を知る術は無いのである。

さつきは、相手に攻撃する事だけを優先してこれを放ったものの、この煙幕がどこかに去るまで、バクフーンには先ほどの戦果を知る事もままならなかった。

「奴等、どうなった？」

「両方無事だ！」

その点、ラグラージは便利である。例え視覚や聴覚が全く利かなくなつたとしても、ヒレによるレーダーは煙幕越しでも相手の位置を割り出せるのだ。

早速バクフーンは相手の行動を既に把握済みのラグラージに戦果を尋ねて見るが、その結果はまさに失望に値するものだった。やはり、慣れない戦法を実戦でいきなり試すものでは無い。当たつたのか当たらなかつたのかは分からないが、何れにせよ、この技は自分の視覚と聴覚を一時不能にしてそれでもフシギダネ一匹倒す威力も無いと言う事なのだ。

バクフーンは、フシギダネが無事と言う事を聞いて取り合えず攻撃のターゲットを再び奴に決めながらも、内心、相当気落ちしていた。

ラグラージの連射するハイドロポンプの破壊力は、地震でヒビ割れている岩には些かでか過ぎた。相手の位置を覚ったラグラージによるハイドロポンプは、次々と相手の隠れるものとその周辺の岩を撃ち砕き、煙幕が完全に晴れるころには、既にフシギダネ達はその体をラグラージ達の視界に曝すしかなかった。

満身創痍の体を引きずって必死で逃げ惑うフシギダネ達だが、ラグラージも、そしてバクフーンも、最早攻撃の手を緩めるようは真似はしない。既にラグラージ達は散々窮鼠　フシギダネ達に噛みつかれて負傷しているのだ。これ以上の被害を防ぐ為にも、ラグラージ達はもう相手が動かなくなるその瞬間まで攻撃し続けるつもりだった。

明らかに最初に比べて動きの鈍ったフシギダネ達を相手に、逆襲を恐れて距離を取ったままハイドロポンプと火炎放射が交互に襲いかかる。反撃の機会を与えない為の、双方の十八番による波状攻撃だった。

まだフシギダネよりかは余裕のあるらしいレアコイルが時折ミラーショットやマグネットボムなどの技で反撃を仕掛けてくるものの、この距離ではそれらの技の軌道を見切るのはかなり容易いもの。外れるものか直撃コースなのかを瞬時に見切り、当たるのなら横に一步移動するというだけでラグラージ達の攻撃は途切れる気配すらない。

フシギダネ達が地に触れ伏す事になるのは、最早時間の問題のように思われた。

フシギダネは、小突き回す様に放たれ続ける炎と水から逃れながら、ただ一箇所　先ほどはフシギダネから離れていたために破壊を免れた石柱を目指し続けていた。もはや、この状況を打開して起

死回生の一撃を決めるには、考え付く限りチャンスはそれ一回。この波状攻撃がずっと続き、そしてラグラージのハイドロポンプの照準がフシギダネではなくその石柱に向いた瞬間のみだった。

動きの鈍った体に攻撃が当たらないようレアコイルから回避を手伝ってもらいながら、フシギダネは、ただそれのみに賭けて足を動かし続ける。既に、移動途中にレアコイルにも計画は話してあるし、計画発動時、レアコイルにはどう動いてもらうかも既に頼んでいる。あとは、その計画が発動する時の前兆を見逃さないようにするだけだった。

ボロボロになりながらも必死で移動を続けたフシギダネは、その時、これまで規則正しかったラグラージのハイドロポンプが一回休んだ事を確かめると、レアコイルの方を見上げた。

ラグラージが、フシギダネが残った石柱に隠れようとした事に付き、陰に逃げ込まれる前に石柱をふっ飛ばそうとしているのだ。時は、満ちた。今が行動の時、最後の反撃のチャンスだ。

フシギダネのこの“見上げる”という合図を見逃さなかったレアコイルは、それを受けて僅かに上昇、フシギダネの上で止まった。そして、ロックオンした状態からバクフーンをトリアタックで狙い撃つ。

バクフーンは、これを見て直撃コースだという事を覚ると、僅かに横にずれ、そこから火炎放射を放った。ラグラージが石柱を壊そうとしているのを知っているらしく、攻撃を放つタイミングは波状攻撃をしていた時よりも更に短い。

その火炎放射は、本来フシギダネが計画していたレアコイル狙いの軌道と違ってフシギダネ自身を狙ったものであったが、今更計画の変更は効かない。フシギダネは、レアコイルによる背中の後押しが無い状態でなんとか前につんのめる様にして直撃をかわすと、転んで地に腹を付けながらも、そこで背中へと力を集めた。

天から降り注ぐ日光、そして、後ろを通り過ぎる灼熱の業火。それらを合わせた光量　瞬間的なルクスの数値は、本来夏至の日に

降り注ぐ日光よりも大きい。つまり、真夏のうだる様な日差しよりも しいて言えば、日本晴れを使った時に降り注いでくれる量よりも大きい。

その強烈な光は、僅か一瞬であっても莫大なエネルギーに換算する事ができる。まして、その光がある程度長く続いてくれる っまり、火炎放射の様にその光源がしばらくの間照り続けてくれるのであれば、そのエネルギー量は凄まじい桁にまで膨れ上がる。

これだけの光があれば、草タイプのポケモンにおける奥儀“ソーラービーム”の力を溜め終わるには、最早十分だった。火炎放射による強烈な光の放射をソーラービームのチャージに流用するという第一のステップは、これにて完了である。

刹那、息を吸い直すバクフーンと入れ替わりに、今度はラグラージがハイドロポンプを撃ち放った。本来ならば、これも火炎放射同様フシギダネを狙っていて然るべきものだったが 残念ながら、今ラグラージが狙っているのはフシギダネの視線の延長線上にある石柱である。離れた場所にいる、ソーラービームのチャージを終えたばかりのフシギダネの行動を阻害しはしない。

フシギダネの身代わりとなった哀れな石柱が木っ端微塵に砕け散る刹那、再びレアコイルがバクフーン目掛けてトライアタックを撃ち放つ。

ロックオンしているだけに、狙いは精確。バクフーンは、再度それを直撃コースだと見切って横へと退避する。

その時を狙い、フシギダネはソーラービームの狙いをラグラージへと付けた。ハイドロポンプは確かに威力は強いものの、やはりどんなポケモンでもそれを放った後の一瞬は隙が残ってしまうもの。

どうでもいいもの目掛けてハイドロポンプを放ち、大きな隙を見せてしまったラグラージにとって、このわずかな隙こそが命取りだった。そして、トリアタックに気をとられ、フシギダネの動作から一瞬気が逸れたバクフーンも、ラグラージのこの隙を埋めてやる事はできなかつた。

フシギダネは、自身の背中にある蕾へと意識を集中し、たった今溜めたばかりの力の総てをその中心へと集結させる。急激に集まり行くエネルギーは留まりきれずに周囲にも溢れだし、蕾の中心にオレンジとも、白と表現できる光が灯った。

レアコイルは、フシギダネの邪魔にならないよう発光する蕾の上から退くと、雷光とはまた違った輝きを放つその光に視線を落とす。その目の前で、急激に強まった光がフシギダネの体を包みこみ、刹那、強烈な閃光と共に黄金色に輝く太陽光線は発射された。

ラグラージは、フシギダネがこれを放ったその瞬間、すぐに自分目掛けて何が飛んできているのかを見切った。

しかし、ソーラービームは葉っぱカッターやタネマシンガン、エナジーボールなどとは違い、本体が光である。その飛翔速度は、例え秒速で比べてもフシギダネが使える他の技とは桁が違う。

ラグラージが回避運動に入るが、今更それでは到底間に合わない。狙い澄まされたソーラービームは、身を投げ出そうとしたラグラージの必死の回避も虚しく、その胴体へと突き刺さった。

傍からこれを見ていたレアコイルは、着弾したソーラービームが地面を抉り飛ばし、そして尋常じゃない爆発音を轟かせたのを聞いて、喜びを通り越して最早呆然とした。

ソーラービーム。草タイプのポケモンが時間をかけて準備し、そして満を持した上で初めて放つ必殺奥儀。他の技と比べても桁外れのその威力を目の当たりにし、レアコイルは、半ばバクフーンに対する警戒すらも忘れてただ浮かんでいるしかなかった。

「へへっ、やった……」

その時、表情に疲れを滲ませたフシギダネが、傍から見ても一目瞭然の戦果を見ながらニツと笑ってみせる。

視線を落としたレアコイルは、してやったり、とでも言いたげな様子のフシギダネに視線を落とすと、正直に凄いな、と思った。

フシギダネは進化してない事もあり、体力も、そして技の威力も、レアコイルには敵わなかった。この戦いの間も、フシギダネはレア

コイルに比べて余裕が無く、助けてもらおう事が多々あった。それに、全く同じ攻撃を全く同じ時に受けたにも拘らず、弱るのもフシギダネのほうがはるかに早かった。

ほぼ全てにおいてレアコイルに負けているこの小さな体の何処に、これだけの力が眠っていたのだらうか。視線に気付いたフシギダネが振り返ってくるのを見返ししながら、レアコイルはそう感想を結んだ。

「クソッ！」

しかし、レアコイル達にこれ以上惚けている暇は無かった。

ラグラージが倒された事を確認したバクフーンの咆哮が響き、一時間閉じられた戦いの幕が再び切り落とされたのだ。

今フシギダネ達がいる場所は、たった今使った作戦の関係上周りに何の障害物も無い。砕かれた岩の破片ならば周囲に散ばっているものの、それは体を隠すには小さすぎる。バクフーンの火炎放射ならば、その岩諸とも炎に包まれる事になるのは確実である。

ラグラージの岩石封じの石柱は、まだあと二、三本だけは生き残っているようだが、そこまでの距離はここからではかなり離れている。近付こうとすれば、たちまち回りこまれるのが関の山だった。

しかし、バクフーンが火炎放射を放ってくる事を前提として考えていたフシギダネやレアコイルの考えは、ここでも甘かった。

ラグラージが倒された事により、仲間の攻撃に配慮しなくてもよくなったバクフーンが火炎放射以上の大技を放つ準備をしていたのだ。

てつきり火炎放射が飛んでくる事しか想定していなかったフシギダネは、唐突にバクフーンが噴煙を噴き上げた事に、僅かに首を傾げた。相手が何か企んでいるというのが見え見えだったからである。そのため、相手の狙い何なのかを見極めようとしたフシギダネ達は、その次の瞬間には大慌てで逃げるしかなかった。

それは、まるで火砕流のようだった。バクフーンは真っ黒の噴煙を噴き上げた後、それを火炎放射の風圧に乗せてこちらに突っ込ま

せてきたのである。元々から熱い噴煙を火炎放射に乗せたため、その温度は合わさって普通の炎よりも高くなる。また、攻撃本体がその温度の為に周囲に撒き散らす熱気も半端なものでは無く、それは直撃を食らわなくても 皮一枚でかわしただけでもダメージを受けてしまう。それどころか、強化された噴煙は空に上ってもその温度を落とす事無く風に流されて広域に広がり、フシギダネ達はそれだけで空を潰された事を覚った。

空がこの熱さでは、飛んだ瞬間からダメージを受ける破目になる。空に逃げた自分達を撃ち落とすのではなく、元から空を自分達が逃げ込めないような環境に変えてしまったのだ。レアコイルは、高度を上げれば上げるほど温度の高くなるこの攻撃に、浮いているのさえ辛くなり、身を縮こまらせて地表を這った。

「い、今までこんな放ってこなかったくせに」

「どうしよう、空路が断られた」

レアコイルも、そしてフシギダネもが揃って焦燥を露にし、口々にそう呟く。

だが、そう言って見た所で何一つ状況は変わらない。むしろ、下手に時間が経った事で上空の噴煙がまだ余熱を残したまま火山灰の如く降り注ぎ、フシギダネ達は大慌てでその下から逃げ出していった。

元から残り少ない体力で、この中に長時間いるのは自殺行為に過ぎない。ダメージを被るのを防ぐには、これしか方法が無かった。

ところが、フシギダネ達がなるべく噴煙から離れようとする事ぐらい、バクフーンには容易に想像できる。すぐに二発目の火砕流が高原の中を疾走し、フシギダネ達は、二筋の噴煙の間に取り残された。

「ど、どうしよう」

空気中ではすぐに消える実態の無い火炎放射と違い、細かな塵という実体のある噴煙は、その攻撃が終わった後も場への残留効果がある。一部は空に舞い上がったと言えども全てが舞い上がるわけ

はないため、地上には線引きしたような攻撃痕が残る。

他の場所に逃げようと思えば、今尚高温のこの線を跨がなければならぬ。フシギダネとレアコイルは二本目の線の前で立ち往生しながら、完全に退路を断つこの噴煙のラインを不安げに見つめるしかなかった。

「ね、ねえ。僕の電磁砲じゃこれ途切れないかな」

その時、レアコイルが躊躇いがちにそっくり、フシギダネは振り向いた。

「つまり？」

「だから、爆発させて、その風で道開かないかなって……」

噴煙を構成する粒子は、風に乗るほど小さな物。だからこそ、こうした火砕流のような攻撃に転用できる。ならば、風　それも火炎放射の風圧より強力な爆風を起こしてやれば、それは吹き飛んでくれるのではないか。フシギダネはレアコイルの言葉からそう言いたいのだろうと解釈すると、ひよっとしたら上手く行くかもな、と思った。

爆風は、爆心を中心に風を三百六十度全方向へと放つ。そのため、爆心地点には他の場所からの風も流れてこないで、吹き飛ばした傍から他の噴煙が舞い込んで来るということも無い。上から噴煙が降り注ぎ続けているためにすぐにそこも埋まってしまうだろうが、通り過ぎるだけの時間ならば道を確保できるかもしれない。

やろう。フシギダネは、そう言おうとしてレアコイルの目を見た時、ふとある事に気付いて、一瞬固まった。

レアコイルの体は、その名の通りコイル、つまり電磁石である。体を構成する三つのユニットの左右にそれぞれ付いている物も文字通り磁石であり、使い方によっては自分で発電する事も不可能では無い。

その磁石に、噴煙の粒子とはまた別の何かがかくつ付いているような気がし、フシギダネは徐に蔓を伸ばした。軽く六つの磁石の内の一つを拭ってやり、蔓の先についたそれを目の前へと持ってきて確

認してみる。

砂、ではない。妙に細長く、そして触ると形状を崩すものの、なかなか硬い。

もしや、これは。フシギダネは、レアコイルの体の特徴、そしてこの感触から、このレアコイルの体にくっ付いた物体の正体を絞り込んだ。

「ねえねえ」

いきなり妙なものを眺め始めたフシギダネに対して、レアコイルは不安を露に声をかけた。

この切羽詰った状況に、一体何に目を奪われているのだろうか。頭上には、火炎放射によって巻き上げられた噴煙がもうすぐそこにまで迫っている。未だに高温を保っているそれは、被ればレアコイルは勿論フシギダネにも被害があるはず。

今まで相手の裏や隙を突く奇抜な戦法を考え出してきたフシギダネの動作だとはいえど、レアコイルはそう突っ込まざるをえなかった。

「いや、僕がやるよ」

だが、フシギダネはそう言いながらレアコイルに背を向けて数歩歩き、そしてくるりと反転。再度、噴煙のラインの方を向いて立ち止まった。

「“電磁砲”は最後までとっておいて
「え？」

レアコイルは、フシギダネが電磁砲と言う時、妙に強調したような気がして思わず聞き返した。どうやら、フシギダネの頭の中には既に次なる奇策が生み出されているらしい。

それがどんな内容なのかはサッパリ分からないものの、その奇策を実行するのに自分の電磁砲が必要なのだという事だけを認識すると、レアコイルは黙ったまま場所を開けた。

直後、フシギダネから普段より大きめのエネルギーボールが放たれ、噴煙のラインの中に入った。と同時に、爆発。土くれを巻き上

げ、噴煙を吹き飛ばしながら、エナジーボールはその力を周囲にバラ撒いた。

爆発によって、噴煙のラインはレアコイルの考え通りに途切れを見せていた。

やはり、である。この噴煙のラインは、バクフーンがずっと吐き続けているわけでもなければ、地面から噴出し続けているわけでも無い。ただその地点を舞っているだけに過ぎないのだ。それ自体が熱いために自分達は触れられないが、固定されているわけでは無い噴煙の粒子は、爆風をぶつけてやれば意図も簡単に散り散りになってしまう。

レアコイルは、切り開いたその道をフシギダネと共に通りぬけながら、まずは助かったな、と思った。

だがその刹那、たった今自分が通り過ぎたばかりの噴煙の途切れに何かか着弾、土くれを撒き散らした。いや、一発だけでは無い。何処からとも無く飛んでくる光る弾丸が、次々とレアコイル達の傍で跳ね回った。

「わっ！」

レアコイルは、体の三つのユニットの間をその弾丸が飛びぬけた事に思わず悲鳴を上げた。ちょっとでも位置がずれていれば確実にくらっていたコースである。爆ぜ回る弾丸はかなり広範囲にばらけているため今のはあくまで偶然なのだろうが、それでもレアコイルは背筋の凍る思いがした。

風の関係上、噴煙の流れて行く方向というものは粗方決まっている。フシギダネとレアコイルはバクフーンを中心に大きな弧を描くように這い続けると、噴煙の降り注ぐ範囲をなんとか脱出した。

空を完全に潰し、さらに地上に灼熱の粉塵を降り注がせるこの火砕流を放たれた奴等は、必ずその攻撃範囲から逃れようとするはずだ。

バクフーンは、念のために何故か爆発音の聞こえてきたほうにス

ピードスターを乱射した後、いずれ相手が出て来るであろう場所に移動、待ち伏せた。

今までの戦いから、奴等がそう簡単に倒れるような連中でない事は重々承知している。一応火砕流で両側を封じたものの、どうせ奴等はそれを突破して出て来るに違いない。二発目の火砕流を放つ直前の奴等の位置から言って、恐らく奴等が出てくるのは風下側。多少なりとも火砕流の威力に自信があるバクフーンは、奴等がそう何時までもあの中に留まっていられないと見越しての決断だった。

相手が出てきた所を、真正面から迎え撃ってやる。今回は噴煙で退路を断った上、近くにラグラージの岩がないため射線がよく通る。岩に気を取られる心配も無い。小手先技は、もう仕掛けさせはしない。正面から決闘を　火炎放射以上の大技を引っ提げて挑んでやるのだ。

バクフーンは、最終兵器とも言える破壊光線をぶっ放せる準備をしながらも、静かに噴煙の中を見つめ続けた。

それから数分後、イトマルが地を這うかのような姿勢の低さで姿をちらつかせたフシギダネ達を相手に、バクフーンは挨拶代わりの火炎放射をお見舞いした。

当然、相手もこちらの待ち伏せぐらいは予期していたはず。いや、バクフーンは、当然予期しているものとして迎え撃った。そのため、相変わらず火炎放射が当たらなかったとしても、バクフーンは驚きもしなかった。

だが、状況は確実にこちらに有利。相手は、噴煙の効果範囲を逃れる為にもさらにこちらに前進してくる必要がある。対して、自分にはそういった制約は何一つ無い。例え何かの拍子に位置が入れ替わったとしても、自分で繰り出した噴煙でダメージを受けるほどバクフーンの毛皮は脆くない。つまり、いざという時は噴煙の中に逃げ込めるといって逃げ道も確保された状態でもある。

「掛かって来い！」

バクフーンは、相手の進路に仁王立ちするとそう叫んだ。

すると、流石に退路が無いだけ相手も必死らしく、何か行動するよりも先にマグネットボムや葉っぱカッターを撃ち放ってくる。

バクフーンは、寸前までひきつけてから軌道を見切ると、サイドステップでその射線から逃れた。そして、相手から第二波の攻撃がくる前に反撃に再び火炎放射を放つ。

だが、フシギダネ達は火炎放射を回避しながらも、それぞれタネマシンガンやミラーショットでの反撃をやめなかった。前までの徹底して回避する姿勢は何処へやら、一変して攻撃こそ最大の防御なりと言う理論に逃げ込んでいるようだった。

それだけ、相手にも余裕が無いということなのだろう。バクフーンは、サイドステップを繰り返してその射線をも避けると、近付いてくる相手の足下目掛けてスピードスターの弾幕を叩き込んだ。

火炎放射と違い、弾数が多い分回避は難しい。それを、わざわざ相手の足下目掛けて叩き込んだのだ。フシギダネ達は、足払いの様なこの攻撃に高リスクを犯してまでその中に突っ込んでくる事はできず、その場で一瞬立ち止まってしまふ。そこを目掛け、今度は本命の火炎放射を叩き込む。

スピードスターに気を取られて固まっていたフシギダネは、火炎放射が飛んでくる事を覚ると横に大きく跳んだ。

「離れて」

フシギダネが、着地しながらレアコイルに対してそう声をかける。一緒にいてはまとめて倒されるとでも思ったのだろうか。いや、

狭狭み撃ちすればまだなんとかなるとでも思ったのだろうか。いずれにせよ、レアコイルとフシギダネが離れた為にバクフーンは取り合えず後ろに跳び退いて距離を取ると、両方の動向を視界に収めた。

レアコイルからトラリアタックが、フシギダネからエナジーボールが飛んでくる。だが、跳び退いたおかげでそれを両方とも視界に収めたバクフーンは、トラリアタックをバックステップでかわし、エナジーボール諸ともフシギダネを焼き払う。そして、フシギダネが回避している間にレアコイルにも一発。

さらに、フシギダネのタネマシンガンは無視してレアコイルにスピードスターをお見舞いしたバクフーンは、レアコイルが後退するのを尻目に、フシギダネへと振り返った。その間に飛んで来ていた葉っぱカッターをまたサイドステップで交わしながら、バクフーンは火炎放射を撃ち放つ。

だが、この火炎放射を避けたフシギダネが再びタネマシンガン、そして横からトライアタックらしき攻撃を放つ音を聞き、十字砲火されたか、と思った。いつの間にもやら、バクフーンの真正面にはフシギダネ、そして真横にレアコイルがいるという配置になっていた。バクフーンの視界は、真横九十度までカバーする事はできない。つまり、どちらかと対峙している限り、どちらかに横っ腹を曝し続けなければならぬ。二対一の状況においては典型的とも言えるほどメジャーな戦法である。

だが、このままむざむざと戦況を持って行かれるほどバクフーンは素人では無い。

バックステップを数回繰り返して距離を取った後、一度相手の攻撃を掻い潜って様子を見たバクフーンは、相手に前進以外動くつもりが無い事を確認すると一気に走り出した。とはいえ、逃げるのには無い。むしろ逆、スピードスターを乱射しながら、フシギダネ目掛けて突っ込んだ。

遠距離攻撃による十字砲火は、一般に陣形を保ちやすい攻撃方法だとされている。だが、それは仕掛ける側が自由に動ければの話。元々後ろに下がれないのに仕掛けた所で、こちらが距離を詰めてしまえばその陣形は容易く崩れ去る。それどころか、相手に割り込まれては味方同士の連絡も上手く行かなくなる。

相手からタネマシンガンによる反撃がくるが、残念ながら威力の面ではこちらの方が上。弾丸同士がぶつかり合った時、先に潰れるのはタネマシンガンの方だった。持ち前の動体視力のおかげもあり、殆どスピードを緩める事無く一気に距離を詰めたバクフーンは、そのまま火炎車を狙いながらフシギダネに飛びかかる。

だが、近距離戦は嫌らしいフシギダネは途中でタネマシンガンを中止すると、スピードスターをくらうリスクを犯してそれでも、横へととびのいた。そして、バクフーンが狙いをつけなおす前の隙を突いてエナジーボールを狙ってくる。

だが、それをヒョイと一歩分横に移動する事でかわしたバクフーンは、背中から発火しながら突撃した。

スピードも、そしてパワーもこちらの方が上。また、自分がここまでスピードに乗って距離を詰めている以上、今更何か飛び道具を狙った所で到底間に合いはしない。バクフーンは、最早目前まで迫った敵から視線を離す事無く、ラグラージを片付けてくれた礼に一矢報いる事ができたかなと思った。

だが、フシギダネは最後まで冷静だった。むしろ、バクフーンがトップスピードに乗っている事を利用し、寸前まで引き付けてから横に転がる様にして回避したのだ。

それを見て、すぐにブレーキをかけるバクフーン。しかし、全速力に近い速度で走っているは、止まるのに数秒のロスがある。その際に、フシギダネは一目散に逃げだした。

バクフーンは勿論それを追おうとするが、その時、真後ろに攻撃の気配を感じ、バクフーンは、背中 of 火炎噴出孔に力を集めた。

火炎車を応用し、真後ろの敵目掛けて炎を噴出すバクフーンならではの後方迎撃技、後方噴射炎　バックプラスト。振り返る事無くそれを発動する事で、バクフーンはマグネットボムを放ちながら近付いて来ていたレアコイルを迎撃した。

飛んで来ていた金属片を火炎の風圧で吹き飛ばし、後ろ目掛けて噴出した火炎はレアコイル本体をもその攻撃範囲に含む。

残念ながら、口から炎を吐いた時と違って威力が弱いのが欠点だったのだが、相手を驚かすにはもってこいである。バクフーンは、レアコイルがどうやらソニックブームで何とか火炎を打ち消したらしいと覚ると、素早く振り返って口をあけた。

さつきから準備だけをして一向に使わなかった技、破壊光線。

本当は、フシギダネを吹き飛ばすのに使おうかと思っていた技だが、このタイミングで放って見るのも悪くない。背中からの炎の反撃で怯んだレアコイルは、これにどんな反応を示すだろうか。

だが、当たれば一撃クラススの最終兵器を発射完了状態まで持つて行き、そして照準をつけようとした時、バクフーンは目を見開いた。レアコイルは、怯んでなどいなかった。それどころか、体中に電気を纏ってまだバックブラストの余熱の残る空間に突撃し、あるうことかこちら目掛けてトライアタックを放って来ていたのである。

隙を見せたのは、こちらだったか。バクフーンは、想定外の半分捨て身であるこのレアコイルの突撃に少々焦りを感じると、トライアタックを相殺する様に軌道を修正してから破壊光線をぶつ放した。本来の目論見である光線直撃は諦めるしかないものの、爆風だけでもまだ十分なダメージは望める。地面に着弾して起爆することさえできれば、直撃とそう大差はあるまい。

僅かに下向きに発射された破壊光線は、トライアタックを容易く飲み込み、バクフーンの考えどおり、地面に突き刺さるとそのエネルギーを暴走させた。

なんて事だ。自分があまりに危うい事をしたばかりに、レアコイルにとんでもない真似をさせてしまった。

フシギダネは、破壊光線の爆発音を聞いて二人の方を振り返り、そして取り返しの付かないような事態になっているのを見てそう思った。

バクフーンの目の前で起こった大きな爆発は、その爆風に大量の土くれを巻き込んで吹きあがり、空気の奔流というより壁となってレアコイルの体を打ち据えていた。あれほどのものをくらっては、そうそう無事ではいられないだろう。

「よくも……」

フシギダネはバクフーンと違い、そう何度も戦いを経験したことがあるわけでは無い。まして、そう何度も戦いを経験していない中

では、仲間が倒される事には尚更慣れていない。

そのため、ラグラージを倒されてもバクフーンが暴走だけはしなかったのとは違い、フシギダネは頭の中で理性の回線が火花を上げて焼き切れるのを止める事はできなかった。今まで冷静を保っていた頭が我慢の限界を向かえ、かつて、元々不機嫌だったラグラージがやってしまったのと同じミスをした。怒りに我を忘れてしまったのだ。

フシギダネは、エナジーボール、そして葉っぱカッターを続け様に発射、まだこちらに背を向けるバクフーンを狙った。

だが、バクフーンは当然のようにすぐにそれに気付き、振り向きざまの火炎放射で反撃してくる。さらに、エナジーボールをサイドステップで避け、葉っぱカッターの大半を焼き、また火炎車を狙いに行く。

しかし、怒りで一時的に疲れを忘れたフシギダネは、先程の動きの鈍り方は何処へやら、一発目の火炎放射を大きく横に跳んで回避と同時に再び葉っぱカッターを乱射する。火炎車を狙って加速し始めていたバクフーンは、些か狙いの乱雑なこの葉っぱカッターを足止め攻撃だと判断。弾幕の幅の広さから突っ込んででは自殺行為だと即断し、バクフーンは火炎放射を放ちながら取り合えず横へと避ける。

だが、フシギダネの攻撃はこれだけでは無い。葉っぱカッターを火炎放射で相殺する事で回避したバクフーンの顔面目掛け、続けて蔓を勢いよく突き出す。そして、バクフーンがこれを見て斜め後ろに飛ぶ事で回避するのを確かめると、さらに蔓を引き戻しながらタネマシンガンで再び弾幕を張る。

フシギダネ自身気付いていないが、明らかに今までの戦闘の中で一番激しい攻撃の連打だった。

これが、必死になった奴の実力なのか。バクフーンは、中々激しい攻撃のラッシュを繰り返してくるフシギダネの様子を見てそう思

った。

とはいえど、攻撃のバリエーションは最初と変わらないし、相変わらずほぼ全てを火炎放射で焼き払える事だけは確か。バクフーンは、タネマシガンガンを火炎放射で真正面から迎撃し、それ諸ともフシギダネを狙った。

フシギダネは、基本こちらが火炎放射で狙わない限り動かずに攻撃を乱射する、というように、動きが単調になってきている。どうやらあのレアコイルをバクフーンが吹っ飛ばした事にキレているのだろうが、こちらとしてはそれは好都合。何か致命的なミスを相手が犯すのを待ち、そこから一気に畳みかけてやるのだ。

短気は、損気。戦闘中は、キレても何の意味も無い。むしろ、表面上の戦闘能力だけは上がるが精神面がズタボロになる以上、ちょっとした相手の動きに対処し切れない事もある。

火炎放射を数発反撃として放ちながら、バクフーンは相手が大きな隙を見せるのを待った。

ところがその時。バクフーンは、今の火炎放射連射を回避したフシギダネの背が僅かに光を帯びている事に気付き、まさか、と思っただ。確かあれば、ラグラージを地に沈めた光線技。さつき同様に、バクフーンの火炎放射を光源として利用したに違いなかった。

だが、である。同じ手をそう二度も三度も 特に、あのような印象の強い技を連続でくらうほど、バクフーンも馬鹿では無い。

フシギダネが確実に自分を狙っている事だけを目線で確かめると、バクフーンは素早くしゃがみ、そして相手の発射のタイミングを見計らって地を蹴った。

刹那、今までバクフーンの体があった場所を太い光の矢が貫き、地面に当たったと同時に大爆発を起こした。流星は、ラグラージを沈めただけの威力がある攻撃。直撃はかわしたとは言えども炸裂したその攻撃の余波の効果範囲は広く、背中にその残留エネルギーを浴びてしまう。

だが、倒れるほどのダメージではない。バクフーンは、自身が被

ったダメージを無視して一気に加速し、大技を放った後の隙をついてフシギダネへと突撃した。

スピードも負け、また、遮蔽物の一切無いこの状況で大技をぶっ放してしまった相手の戦略ミスだ。ソーラービームならまだ勝てるかとても踏んだのだから、生憎、バクフーンはラグラージよりも数段素早い。それに、前回のような陽動も無い中では、こちらの気も紛れない以上発射のタイミングに合わせて回避する事など造作も無い。

ラグラージがそうであったように、攻撃を仕掛けるタイミングをじつと窺っていた敵に大技の後の隙をむざむざと曝してしまったのは致命的だったな。

バクフーンは、技の反動で動きの鈍い一瞬の間にフシギダネの前へとたどり着くと、背中の火炎噴出孔から炎を噴出しながら襲いかかった。

途中、一発だけエナジーボールによる反撃がきたものの、この距離なら相手がかか技の準備をしようとしている事は手に取る様に分かる。フシギダネがまだ技を放つ段階に至るより前に、バクフーンは既にその横へと回りこんでいた。

フシギダネが狙いをつけなおそうとする。だが、遅い。バクフーンは、フシギダネから向き直られるよりも早く、今度こそ決定打と言える火炎車をフシギダネの横っ腹に叩き込んだ。

相手は、シヨックに悲鳴も無かった。ただ、狙いの定まらないエナジーボールを暴発させ、どこかで着弾の爆発音を響かせただけだった。

とはいえ、バクフーンはそれだけで満足だった。悲鳴など、本当に止めを刺された相手は発しない。何しろ、止めを刺すという事は言い換えれば、相手に悲鳴を上げる体力すらも残さない事でもある。相手が悲鳴を上げたその時点で、止めを刺し損ねたと判断して更に攻撃を続けるだけだった。

バクフーンは、弾き飛ばされ、地面を転がったフシギダネにチラ

リと一瞥をくれてやると、やっと終決した戦いに溜息をつき、そして想像以上に被害を被った自身を見下ろした。

たかがフシギダネとレアコイル、されどフシギダネとレアコイル、よくもまあ、しぶとくここまで抵抗してくれたものである。確かに、バクフーンも最初は自分自身の実力を鼻に掛けて油断していた事は否めない。だが、あれやこれやと奇策を打ち立てて来る相手に、途中からではあったが最低でもバクフーンは本気を出したつもりである。

家が滅茶苦茶になっていた事から考えるとラグラージの精神状態は到底普通じゃなかっただろうが、だからとて、二対一でもここまですで反撃が来るとは思わなかった。

バクフーンは、自身の毛皮をはたいて汚れを落とすと、さて、と気持ちをし切りなおし、ラグラージを起こしにでも向かうかと思っただ。この分では、凱旋はお預けである。久し振りにバックブラストや火砕流を使っただけに、体力面は勿論、スタミナ面での消費も激しい。とても、勝ったと喜べるような状態ではない。もうちょっと、真正面からのガチンコ勝負だけでなく小手先技への対策もしておかないと、それこそこんな連中を相手にも敗北を記しそうだ。

再度深い溜息をついたバクフーンは、再びフシギダネの方に目をやると、礼を言うげ、と内心で声をかけた。

おかげで、こちらの弱点もよく分かった。戦いにおける油断の怖さもよく分かった。次にこのような事態が起こった時には、この戦いで教訓を元に笑える勝利を手に出来るようにするさ。

バクフーンは、既に動けないフシギダネに対してあくまで内心でそう告げると、ゆっくりとラグラージのいる方へと振り返った。

そこに、満身創痍ではあるがまだ戦意を残した者が浮いているとは夢にも思わなかった。

まだだ。まだ終わってない。

全身土塗れとなりながらもそれでも尚浮いて移動する気力を残し

ていたレアコイルは、全身の電力を三つのユニットの中心へと集めながらそう思った。

フシギダネが思い描いていた、最後の奇策“電磁砲”。言い換えで、“レールガン”。その意味を、スパークをしかけながら破壊光線の爆風を食らって初めて、レアコイルは理解した。

全身に高電圧の電力を溜め込むレアコイルだからこそ出来る、究極とも言える遠距離攻撃。その発動に、まさかレアコイルの体に引っ付きまくったこの“砂鉄”を使うとは思わなかった。

あの破壊光線の爆風を受けた時、スパークを仕掛けようとしていたレアコイルは、その電力で相手の爆風を相殺したのは勿論、ある事にも気付いていた。それは、レアコイルの電力が強まったために一時的に強力になった磁界に、土くれに含まれていた砂鉄が大量に引き寄せられた事だった。

レールガンとは、仕組みを粗方説明するとすれば、電流を流す金属の弾丸に高電圧の電流を流す事で磁界を変化させ加速、電熱で弾丸をプラズマ化して撃ち出す超兵器である。

体の構造上、常に周囲に独自の磁界を張るレアコイルは、電力を操ればそれにつられて磁界の規模、形状も変化する。つまり、元々磁界を自在に操る能力に長けている。さらに、本家電気タイプであるレアコイルは、何もしなくても体の中に雷数十発、数百発分の電力が備わっている。言い換えれば、もともとレールガンを放つのに必要な環境をレアコイルが持っているため、後はその弾丸とする為に必要な電気を通す金属を砂鉄で補えという意味だ。

レールガンにおいて、その弾丸は軽く音速を超える。また、実弾である以上、たとえ相手が蓄電できる体質であったとしても関係無く吹っ飛ばせる。さらに、その弾丸が率いる音速越えにより生じる弊害　ソニックブームや真空波も、レアコイルやその他のポケモンが元々それを攻撃に使っている様に攻撃に転用できる。

用は、直撃は勿論、近くを弾が通っただけでもダメージだ。

レアコイルの三つのユニットにそれぞれ一対ずつある磁石からの

磁力と、中央の本体からの電力供給。それによって巧みに砂鉄を中央の空間へと集め、また電熱で溶鉱して砂鉄を一発の大きな弾丸に仕上げたレアコイルは、その状態のままバクフーンをロツクオンした。

バクフーンが、振り返ってこちらに気付く。だが、まだ放てない。このまま放つては、フシギダネをも巻き込む事になる。

ところが、バクフーンはこちらの状態に気付いても攻撃してこようとはしなかった。おそらく、こちらが全力を注いだ洒落にならない大技を放とうとしている事に気付いたのだろう。フシギダネから離れるような機動で距離を取り、こちらを睨みつけて来る。

しかし、レアコイルはすぐには撃たず、電磁浮遊を使わないで済むある一定の高さギリギリにまで浮かび上がってバクフーンを見下ろした。

超音速で着弾する弾丸だ。さぞ着弾した衝撃は大きかろう。近くの地面に当たれば、それだけでもくらう爆風の破壊力は高いはず。上から相手目掛けて撃てば、直撃は無理でも必ず近くの地面に当てられる。

レアコイルは、すでに動けなくなったフシギダネにチラリ、と視線を超越すと、友を倒された恨みを込め、非情を承知で発射を決断した。

雷を放つ時を超える電力を体の中心の弾丸を通る様に循環させ、その過程で新たに生じる磁界をも味方につける。既に融解の温度を超えた弾丸が液状となり、それでも浴びせられ続ける電流に弾丸が臨界点を突破、液体、固体、気体と並ぶ第四の形状、プラズマへと変化する。

発熱し、進む電光でプラズマが閃光をも放つ中、レアコイルは、相手目掛けてそれを撃ち放った。

こちらが攻撃を放つ前兆でも見せていたのか、バクフーンは確かに、レアコイルがそれを発射する数コマ前にその場を跳躍した。だが、ロツクオンしてある超音速　秒速七キ口の弾丸からそう距

離をおく事など、到底できるものではない。

バクフーンのすぐ傍に着弾したそのプラズマ化した弾丸は、弾道に生じる真空波、音を切り裂く事でできるソニックブーム、そして着弾した衝撃で周囲に撒き散らされた爆風を、一度にその回避を図った相手に襲いかからせた。

いくら戦い慣れたバクフーンとは言えど、これをくらって「痛え」で済むわけは無かった。

あれから、ラグラージ達がこの高原に姿を見せる事は無かった。

聞いた話によれば、それ以来この高原に向かうルートでの沼の拡張は行なわれなくなり、またあの暴君だったラグラージが、川の決壊防止に力を入れ始めたと聞いていた。何故、如何言う理由で彼等がそういう行動をし始めたのかはフシギダネもレアコイルも知らないし、恐らくこれから先も知る事は無いだろう。だが、静かに高原に差し迫っていた危機が完全に消滅した事だけは間違いは無かった。結局、あの戦いの間中周囲に観客はいなかったし、それどころか地震や火砕流で森の中のポケモン達すらが避難したため、あの戦いの詳細を知る者は当事者であるフシギダネ達だけであった。それどころか、皆大規模な戦いがあった事は知っていても、フシギダネ達が戦ったという事実自体を知らなかった。

それもそのはず、普段は気弱であるレアコイルにまだ進化もしていないフシギダネだけでは、まさかあの強大なラグラージ達には敵うわけが無いと見られていたのだ。そのため、戦いの終決直後、二人は森の中で他のポケモン達にボロボロの姿を見られはしたものの、ただ単に逃げ遅れた哀れな被害者として扱われたぐらいである。また、フシギダネ自身、あの戦いの後何時まで経っても進化しなかったし、自分達が戦って勝ったなどと端から信じて貰えるとは思わずに言い触らすような真似も慎んだ。ただ、高原で誰かがラグラージ達を叩きのめして二度と姿を現さないようにしたという話にあれこ

れ尾鰭がくっ付いて回るのを、真実を知っておきながら静かに見守っていただけだった。

とはいえ、あの戦いを通して二人に何の変化もなかった、と言うわけでは流石にない。フシギダネはあれ以来妙に蕾の重さが増し、そして力に満ちているような気がしてならなかったし、以前できなかった光合成による急速な怪我の回復もできるようになった。また、レアコイルもレールガンという必殺技を編み出して以来、電気の扱い方が磨かれ、より精練した電流が放てるようになっていたのだ。

だが、そうした成長をしたとはいえども、本来フシギダネもレアコイルもそう戦いを好む性格では無い。住処を狙われていたあの時こそ応戦するしかなかったが、基本的には戦うよりも逃げの方が多かった。そのため、当事者である二人以外は誰一人としてこの事実には気付かず、それがより一層、二人をあの戦いに勝った誰かさんという肖像から遠ざけていた。

今では、あの戦いの話題も風化してそう聞く事は無くなってきたものの、フシギダネとレアコイルは、今でも静かに、あの栄華を語り合っていたりする。

(後書き)

作者にとって、短編における処女作となる一作。
本サイトに投稿する第一作目でもあるため、投稿テストも兼ねています。

内容こそ変えませんが、見易さその他を考えてチマチマ修正する可能性が御座いますのでそこは御了承下さい。

嗚呼、それにしてもフシギダネ可愛いなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4116w/>

バクフーン・ラグラーJ.V.S.レアコイル・フシギダネ

2011年9月5日03時29分発行